

《 卷 頭 言 》

Good Mental Practice

板 井 茂* Shigeru Itai

静岡県立大学薬学部



私はこの表題で、過去に2度寄稿している。1度目は2003年9月の本誌の巻頭言で、当時製薬企業に勤めていた私が研究所から生産部門に異動した際の気持ちをこの言葉で表現させて頂いた。2度目は大学に転職してまもない2009年に、薬学教育4年制と6年制についての私感を、この表題で述べさせて頂いた。そして、今回が3度目—私は昨年還暦を迎え、大学での研究・教育も、あと、5年を残すところとなった。Good Mental Practice—私が初めてこの言葉を聞いたのは1991年の第16回の製剤セミナーでの現永井記念国際交流財団理事長、永井恒司先生の講演であった。先生の想像力は「GMP」を薬剤師の資質に符合させ、Good Mental Practiceと定義し、その重要性を強調された。欧州においては、Code of Ethics (薬剤師綱領) や、Ethical Drug (医療用医薬品) のようにEthics (倫理) という言葉が使用されており、極めて、Heart-Orientedな薬学職能教育が実践されていることをこの言葉で表現された。私は製剤に関連した職務に30年以上従事しているが、その節目ごとに、いつもこの言葉が心に響いた。しかし、企業に在職していた際はこの言葉を自分への励みとして捉えてきたが、教育に身を置く現在、その対象の多くは学生に向けられている。薬剤師6年制教育が施行され、既に2回の卒業生を輩出している。私が薬剤師国家試験を受験した当時と比較し、事前学習や共用試験(CBT, OSCE)が実務実習の前に導入され、はるかに充実した教育内容になっている。この教育の基本となっているのが、現在も改訂が進められている薬学教育モデル・コアカリキュラムである。これは一種の薬学教育ガイドラインであり、学生の主体的学習、問題解決力の醸成を目的としている。また、具体的な授業科目等の設定や教育の手法は各大学の裁量に委ねられているが、その理念は従来と以下の点において異なる。まず、教員が何を教えるかではなく、学生がどこまで到達するかという到達目標を各授業で設定し、それを明示した点である。また従来は、例えば薬理学、薬剤学といった学科別の授業が実施されてきたが、その境界を取り除き、「薬の作用と生体内運命」といった統合型教育への転換がはかられている。さらに従来の知識重視の教育から、薬剤師としての知識・技能・態度を向上させる教育プログラムの編成が求められている。本カリキュラムでは、その冒頭に一般目標として「生命に関わる職業人となることを自覚し、それにふさわしい行動・態度をとることができるようになるために、人との共感的態度を身につけ、信頼関係を醸成し、さらに生涯にわたってそれらを向上させる習慣を身につける。」と謳っている。この目標達成のため、学生とともに「Good Mental Practice」を実践して行きたい。

*東京大学薬学部卒。大正製薬(株)製剤研究室長、製剤1部副部長、品質試験センター長を経て2007年より静岡県立大学薬学部創剤工学分野教授。医薬品医療機器総合機構専門委員。日本薬剤学会理事。製剤機械技術学会会長。連絡先：〒422-8526 静岡市駿河区谷田52-1 E-mail: s-itai@u-shizuoka-ken.jp